

母乳育児支援に関する要因分析—第2法—

- 池田靖子、高風亜由美、堀内礼子
 出口範子、中村則子、品川光春
 高田圭介、行成哲弘、有田信一
 (長崎小児歯科臨床医会)

【目的】私たちは授乳に関するアンケート調査を行い、その結果の一部を第43回日本小児歯科学会大会で「授乳を止める時期に影響を及ぼす因子—第1報—」として発表した。今回は、「授乳を止めるきっかけ」と「授乳をやめた時の感想」について、分析と検討の追加を行ったので報告する。

【方法】集計データは713名、子どもの平均年齢は3歳11ヶ月(1歳0ヶ月~6歳11ヶ月)であった。性別は男児378名、女児327名、性別不明8名であった。

【結果】1)授乳中止の感想は、「寂しかった」30%、「嬉しかった」12%、「安心した」41%、「達成感があった」8%、「何も感じなかった」9%であり、その感想の割合は子供の性差はなかった。2)感想を中止時の栄養摂取別で比較した結果、母乳群では、「達成感があった*」「寂しかった**」が「ミルク群」「混合群」より多く、「ミルク群」では「何も感じなかった***」が多かった。3)「1歳以降に夜間の授乳あり群」では、「嬉しかった**」と「達成感があった**」が多かった。4)「10ヶ月未満」「1歳ごろ」に中止した場合のきっかけは「母乳の出が悪くなった***」「職場復帰**」「1歳の誕生日を機に***」が多く、「1歳半以降」に中止した場合には「むし歯になるのが心配だった***」「母親自身の体調不良***」が多かった。(χ²有意水準*:5%、**:1%、***:0.1%)

【考察】授乳中止時の感想では「安心した」41%と「寂しかった」30%と複雑な心理が存在すること、その心理状態は授乳栄養摂取の方法によっても異なることが示唆された。また、1歳ごろあるいはそれ以前に授乳を中止する場合には職場復帰など母親側の要因が、1歳半以降の場合には子供と母親の健康に関する要因が多いことが示唆された。

唾液ペルオキシダーゼ活性とう蝕との関係
 - ヒポチオシアン酸産生との関係 -

- 西岡孝浩、小島幸美、西田郁子、日高彰子、牧 憲司

九州歯科大学口腔機能発達学分野

【目的】人の唾液にはペルオキシダーゼ、過酸化水素とチオシアン酸が含まれている。唾液ペルオキシダーゼは過酸化水素とチオシアン酸の反応を触媒し、ヒポチオシアン酸と水を精製し、さらにヒポチオシアン酸と過酸化水素の反応を触媒し酸素とチオシアン酸と水を生成することが知られている。またこれまでの研究により生成されるヒポチオシアン酸は抗菌作用があることがわかっている。今回我々は小児における唾液ペルオキシダーゼの活性とう蝕重症度そしてチオシアン酸濃度やヒポチオシアン酸濃度の関係について検索を行った。

【方法】6歳前後の小児を対象に保護者の許可の得た後、口腔内検診を行い個々の歯牙に対し、う蝕重症度を記録した。その後刺激唾液を採取し、ただちに氷中に保存した。採取された唾液は遠心分離されその上清を研究に使用した。唾液ペルオキシダーゼの活性は酸素電極を使用し酸素発生速度により測定し、チオシアン酸とヒポチオシアン酸の濃度測定には分光学的手法により測定を行った。

【結果】唾液ペルオキシダーゼの活性とう蝕重症度には相関関係があることがわかった。また産生されるヒポチオシアン酸濃度とう蝕重症度にも相関関係があると考えられる。唾液ペルオキシダーゼ活性とヒポチオシアン酸濃度には相関関係は見られなかった。

【考察】う蝕の重症化に伴い抗菌物質のひとつであるヒポチオシアン酸が唾液中に生成されることは、唾液ペルオキシダーゼが防御機構としての作用を持っていると考えられる。ただう蝕重症度の高い小児は唾液分泌量が少ないため、研究に必要なサンプル量が確保できないなどのこともあり、今後もこうした実験を続ける必要があると思われる。